

『范成大詩選』拾遺

三野豊浩

提要

二〇一八年秋天，我从幻冬舎文艺复兴新社出版了《范成大诗选》。这本书一边介绍南宋诗人范成大的生平，一边介绍他的五十八首代表作。其实，我为了这本书而准备的第一稿（初稿）一共辑录了七十二首作品。但是在编辑的过程中，由于各种原因，不得不除掉其中一些次要的作品。这里，我把那些作品重新集合在一起，再补充其他几首而做为拾遗，给读者们介绍。介绍的就是《落鸿》、《二月三日登楼有怀金陵宣城诸友》、《白鹭亭》、《胭脂井三首（其一）》、《枫桥》、《横塘》、《田家》、《古风上知府秘书二首（其一）》、《长沙王墓在闾门外》、《刘麦行》、《宜春苑》、《夔州竹枝歌九首（其三）》、《次韵陆务观慈姥岩酌别二绝（其一）》、《晓枕三首》、《夜雨》和《咏怀自嘲》，以上十八首。我希望读者们通过这些作品的鉴赏，能够了解范成大的文学以及他的为人。

关键词：范成大、南宋、宋诗、周汝昌、『范成大诗选』

はじめに

二〇一八年秋、私にとってはじめての単著となる『范成大詩選』（以下「拙著」と記す）を幻冬舎ルネッサンス新社より上梓した。拙著は南宋の詩人范成大的作品五十八首を収録し、その生涯と共に紹介している。実は、一応の完成原稿として二〇一八年一月八日付けで同社に送った初稿（以下「初稿」と記す）は、合計七十二首を収録していた。その後収録作品を更に絞り込む必要が生じ、十四首を削除し、全五十八首として刊行に至った。しかし、割愛した中にはそのまま捨て去るには惜しい作品も多く含まれていた。そこで本稿では、これらの作品にさらに四首を加えた合計十八首を「拾遺」として紹介すること

にしたい。

本稿は一応それだけで独立した訳注稿となっているが、やはり拙著から派生したものには違いないので、まず拙著の前置きにあたる「はじめに」の部分をご一読いただければ幸いである。また范成大の生涯については拙著の中で紹介してあるので、本稿ではその概略のみを記すことにしたい。《》で示した部分がそれである。

なお、本稿で紹介する作品は拙著と同じくすべて周汝昌氏の『范成大詩選』（人民文学出版社、一九五九年初版、一九八四年新版）所収のものであり、同書の収録順に配置されている。

第一章 若き日の思い 青少年時代 拾遺

《靖康元年（一一二六）六月四日、北宋を滅亡に至らしめた「靖康の変」の起こるわずか五ヶ月前、范成大は平江（江蘇省蘇州）に生まれた。呉郡の范氏は北宋の名臣范仲淹を出した名門であり、父の范杲は徽宗の宣和六年（一一二四）の進士。母の蔡氏は北宋の書家蔡襄の孫娘である。父親の指導の下、范成は十二歳の頃には経書や史書を幅広く読み、十四歳の頃には詩文を書くことができたという。しかし生まれつき病弱で、十四歳の時に大病を患い、あやうく死にかけて。また十四歳で母を、十八歳の頃に父を、それぞれ失っている。このため悲嘆にくれ、以後およそ十年の間、世に出ようとしなかった。若き

日の范成大は故郷の崑山にある薦巖寺にこもって読書し、唐・賈島の詩にちなんでみずから「此山居士」と号し、地元の詩社に参加するなどしていた。自分の好きな文学の世界に没頭がちであり、科擧の受験には消極的であった。》

以下の二首は正確な年代はわからないが、范成大のごく若い頃の作品と推定される。

落鴻

落鴻

落鴻聲裏怨關山

落鴻 声裏 関山を怨む

淚濕秋衣不肯乾

淚 秋衣を湿らせ 肯えて乾かず

只道一番新雨過

只だ道う 一番の新雨 過ぎたりと

誰知雙袖倚樓寒

誰か知らん 双袖 楼の寒きに倚るを

○落鴻 群れからはぐれた雁。○関山 関所のように立ちほだかる山々。○道 言う。○一番 ひとしきり。「番」は量詞。

○双袖 二つの袖。女性を暗示する。○『石湖居士詩集』（以下『石湖』）卷一。七言絶句。韻字は山（上平十五刪）、乾、寒（上平十四寒）。

群れからはぐれた雁

群れからはぐれた一羽の雁。その鳴き声は、幾重もの山々に隔

てられた長い旅路をうらんでいるかのようだ。
 涙は秋の衣の袖を湿らせ、一向にかわこうとはしない。
 人々は、「ひとしきり雨が通り過ぎたね」と言うばかり。
 一体誰が知るだろうか。高い楼の上、寒い思いをしながら欄干
 によりかかっている人がいることを。

かなしくひびくかりのこえ
 なみだのかわくひまもなし
 あめがすぎたというばかり
 つらいきもちをだれがしる

孤独な旅の鳥に自分を重ね合わせてうたう、感傷的な作品。
 「双袖」の人は、故郷で旅人の帰りを待つ妻であろうか。それ
 と明言されてはいないが、「靖康の変」で北方に連れ去られた
 人々への思いが、さりげなく込められているのかも知れない。
 次は、故郷で遠方の友人たちを思う詩である。

二月三日登樓有懷金陵宣城諸友

二月三日 楼に登り 金陵と宣城の諸友を懐う有り

百尺西樓十二欄 百尺の西樓 十二の欄
 日遲花影對人閒 日 遅く 花影 人に対して閒かなり
 春風已入片時夢 春風 已に入る 片時の夢

寒食從今數日間 寒食 今より数日の間
 折柳故情多望斷 折柳の故情 望断すること多く
 落梅新曲與愁關 落梅の新曲 愁いに関する
 詩成欲訪江南便 詩 成り 江南に便りを訪けんと欲するも
 千里煙波萬疊山 千里の煙波 万疊の山

○二月三日 旧暦の二月は春の盛り。○金陵 今の江蘇省南
 京。○宣城 今の安徽省にある。○西樓 蘇州の子城の西にあ
 る楼閣。○十二欄 幾重にも曲がりくねった欄干。○人 作者
 をさす。○春風已入片時夢 唐・岑参の「春夢」詩に「枕
 上片時春夢中、行き尽くす 江南 数千里」とある。○寒食
 冬至から数えて百五日目の節日。この日は火を起こして煮炊き
 することを禁じ、冷たいものだけを食べる。○折柳 ヤナギの
 枝を手折る。旅立つ人を見送る習慣。また「折楊柳」は旅人を
 見送る送別の曲。○故情 旧友を思う気持ち。○望断 はるか
 遠くを眺めやる。○落梅新曲 「落梅」は本来「梅花落」とい
 う楽曲の名。ただしここでは宋代にできた作者不明の「江城梅
 花引」（略称「江梅引」）詞をさす。内容は、やはり望郷の思い
 をうたう。南宋・洪邁の『容齋五筆』によれば、金に使者とし
 て赴き抑留されていた洪皓（洪邁の父）がこの曲を聴き、「ま
 るで自分のために作られたかのようにだ」と慨嘆し、同じ韻を用
 いて四首を作ったという。○訪 ここでは、手紙を届ける、の
 意か。○江南 長江の南の一带。ここでは金陵と宣城をさす。

○煙波 川面にかかるもや。○『石湖』卷一。七言律詩。韻字は欄（上平十四寒）、間、間、関、山（上平十五刪）。

二月三日、高樓に登り、金陵と宣城にいる友人たちをなつかしく思い出して

百尺もの高さにそびえる西の高樓、幾重にも曲がりくねった欄干。

春の盛りなので日は長く、花の影が静かにこの私と向き合っている。

春風はすでにつかの間の夢の中へと入り込み、寒食の節日は今から数えてあと数日の後。

ヤナギの枝を手折って別れた友を思う気持ちのため、何度もはるか遠くをながめやり、

「江梅引」の新曲に込められた思いは、私の愁いと深くかわっている。

詩が出来上がり、江南の友人たちに便りを届けたいと思うものの、

千里の彼方まで川面にはもやがたなびき、山々は幾重にも重なりあっている。

たかどののうえはるのかぜ
はなめでつつもうれいあり
やまのかなたのわがともに

たよりとどけるすべもなし

周汝昌氏は「この詩は韻律が流麗で、范成大の初期の七言律詩の風格を代表している」と評する。やはり感傷的な作品であるが、友情と憂国の思いが微妙に交錯している。

《故郷にこもっていた范成大は、亡父の友人王葆の忠告により奮起し、科挙の受験を志す。紹興二十三年（一一五三）、科挙の地方試験が建康（江蘇省南京）で行われ、受験の準備のため范成大は建康に赴く。時に二十八歳。》

以下の二首は、建康を訪れた時の作である。

白鷺亭 白鷺亭

倦遊客舎不勝閒 遊に倦み 客舎 閒に勝えず

日日清江見倚闌 日日 清江 闌に倚りて見る

少待西風吹雨過 少く西風の雨を吹きて過ぎしむるを待ち
更從二水看淮山 更に二水より淮山を看ん

○白鷺亭 建康にある亭の名。賞心亭（拙著二十四頁参照）の近くにあり、江中の白鷺洲を俯瞰できる。○倦 飽きる。○遊 旅。○客舎 旅館。○不勝閒 北宋・王安石の「江亭晚眺」詩

に「清江 無限に好しきも、白鳥 閑に勝えず」とある。○欄
欄干。○西風 秋風。○二水 当時の地形では、長江の水が白
鷺洲によって二つに分けられており、川筋の別れる所に二水亭
があった。唐・李白の「金陵の鳳凰台に登る」詩に「二水 中
分す 白鷺洲」とある。○淮山 周汝昌氏は「長」江の北岸
の山」と解説するが、字義的には「淮河のあたりの山々」であ
ろう。淮河は当時の国境であり、長江のほとりにある建康から
見えるはずはないが、二水亭から見える山をそれに見立ててい
るのであろうか。○『詩集』巻二。詩形は七言絶句。韻字は間
(上平十五刪)、闌(上平十四寒)、山(上平十五刪)。

白鷺亭

旅にも飽き、旅館では閑をもてあましている。
来る日も来る日も、清らかな長江の流れを欄干によりかかって
眺めている。
しばらくの間、秋風が雨を吹き送るのを待ち、
さらに今度は、川の流れが二筋に別れる所から、淮河のあたり
の山々を眺めるとしよう。

ひまもてあます たびのやど
まいにちみてる かわのみず
あめふくかぜがすぎたなら
とおくのやまをみてみよう

受験勉強の合間に書かれた詩なのであろうか。この詩を見る
と、陸游ほど激烈ではないまでも、范成大も南北に分断された
当時の状況に問題意識を抱き、失地を回復すべきという意志を
有していたことがうかがえる。実際には目で見ることができず
とも、作者の脳裏にはきつと当時の国境である淮河一帯の情景
が浮かんでいたに違いない。
建康を訪れた范成大は、この町の治乱興亡の歴史に思いをは
せたであろう。次の詩は、歴史を題材とする「詠史詩」であ
る。

臙脂井三首

臙脂井 三首(其の一)

昭光殿下起樓臺 昭光殿下 樓台を起て
拚得山河付酒杯 山河を拚て得て 酒杯に付す
春色已從金井去 春色 已に金井より去り
月華空上石頭來 月華 空しく石頭に上り來たる

○臙脂井 南京の玄武湖の近くにある台城中、景陽楼の下に
ある。陳の後主が国を滅ぼされた時、二人の寵姫と共に身を隠
したと伝えられる井戸。「臙脂」は女性の化粧をさす。○昭光
殿 正確には光昭殿。陳の後主が建てた宮殿。○起楼台 後主
は光昭殿の前に臨春・結綺・望仙という三つの楼閣を建てた。
いずれも壮麗で贅を尽くし、ここで宮女たちと日に夜を継いで

遊びたわむれたという。○拵得 うち捨てる。「得」は助字。
○付酒杯 酒色の楽しみの中につき込む。○春色 春の気配。
繁栄を暗示する。○金井 臙脂井をさす。○月華 月の光。○
石頭 石頭城。三国時代呉の孫権が建てた城の名。南京の代名
詞として詩にうたわれる。○『石湖』卷二。七言絶句。韻字は
台、杯、来（上平十灰）。

化粧の井戸 三首（その一）

陳の後主は光昭殿の前に豪華な楼台を築き、
あたり壮麗な山河をうち捨て、ことごとく酒色の楽しみの中に
つぎ込んだ。

春の気配はすでに金の井戸から消え去り、
月の光が空しく石頭城の上にのぼって来た。

ごてんの まえに うてな たて
あそび ほうけて くに つぶす
はるの けはいは いどを さり
つきは むなしく しろ てらす

この詩は、南朝最後の君主となった陳の後主（陳叔宝）をう
たう。陳は北朝の隋に攻め滅ぼされるが、その時後主は二人の
寵姫と共に井戸に身を隠した。しかし発見され、引きずり出さ
れて生き恥をさらしたという。范成大はこの他、七言絶句「陳

叔宝を弔う詞」も書いている。陳の後主に特別な思い入れが
あったのであろうか。あるいは隋に滅ぼされた陳に、金と対峙
する南宋を重ね合わせているのかも知れない。なお詩の第四
句、石頭城に登る月は、唐・劉禹錫の七言絶句「石頭城」を連
想させる。

次の詩は「城西道中」と題する七言絶句二十首の連作の中の
一首である。于北山氏の『范成大年譜』によれば、紹興二十一
年（一一五一）、二十六歳の時の作。

楓橋

楓橋

朱門白壁枕彎流 朱門 白壁 彎流に枕み
桃李無言滿屋頭 桃李 言う無くして 屋頭に満つ
牆上浮圖路傍埃 牆上の浮図 路傍の埃
送人南北管離愁 人を南北に送り 離愁に管す

○楓橋 蘇州の寒山寺の前を流れる運河にかかる橋の名。○枕
臨む。ここでは動詞。○彎流 湾曲した川の流れ。○桃李無言
漢・司馬遷『史記』の「李將軍列伝」に「桃李言わざれど
も、下自ら蹊を成す」とあるのによるが、ここでは本来の意
味とは無関係に用いられている。○牆 垣根。○浮図 お寺の
塔。○路傍 道ばた。○埃 道しるべ。道標。○管 かかわ
る。○離愁 別れの愁い。○『石湖』卷三。七言絶句。韻字は

流、頭、愁（下平十一尤）。

楓橋にて

朱塗りの門と白塗りの壁が、湾曲した川の流れに臨んでいる。桃とスモモは言葉もなく、寺の屋根の上いっばいに花を咲かせている。

垣根の上にそびえ立つお寺の塔と道ばたの道しるべは、これまで数知れぬ旅人を南へ北へと送り出し、別れの愁いにかかわって来たのだ。

まっかなもんとしろいかべ
やねのうえにはもものはな
おてらのとうとみちしるべ
たびびとおくるきたみなみ

蘇州の寒山寺をうたうこの詩は、唐・張継の七言絶句「楓橋夜泊」を念頭に書かれていよう。

月落烏啼霜满天 月 落ち 烏 啼いて 霜 天に満つ
江楓漁家對愁眠 江楓 漁火 愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外の寒山寺
夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲 客船に到る

ただし、張継の詩は寒々とした秋の夜の情景をうたうのに対し、范成大の詩は春の花の盛りの日中の情景をうたっており、雰囲気完全に逆転させている。それでいて旅愁の主題は原作をしっかりと継承しているのであるから、なかなか巧妙である。次の詩も同じ連作の中の一首であり、錢鍾書著・宋代詩文研究会訳注『宋詩選注3』（平凡社東洋文庫、二〇〇四年）に収録されている。

横塘 横塘

南浦春來綠一川 南浦 春來 綠一川
石橋朱塔兩依然 石橋 朱塔 兩つながら依然たり
年年送客横塘路 年年 客を送る 横塘の路
細雨垂楊繫畫船 細雨 垂楊 画船を繫ぐ

○横塘 地名。蘇州の郊外にある名所。○南浦 川の南岸。古くは『楚辞』に見え、多くの場合、別れの場所として詩にうたわれる。○一川 ここでは、平野一面、の意。○客 旅人。○細雨 小雨。○垂楊 しだれ柳。○画船 美しい飾り模様のある船。○『詩集』卷三。七言絶句。韻字は川、然、船（下平一先）。

横塘

川の南岸は、春になつてからというもの、一面の緑色。石の橋も朱塗りの塔も、どちらも昔と変わらぬ姿のまま。毎年毎年、旅人を見送る、ここ横塘の道。小雨の降る中、しだれ柳に美しく飾られた船がつながれている。

いちめんみどりのわたしばに
むかしながらのはしととう
まいとしひとをおくるふね
あめのやなぎにつながれて

この詩は范成大の初期の代表作の一つで、変わらない風景と変わりゆく人の世の姿を対比させてうたっている。淡い感傷に彩られた作品である。

次の詩は、後に「四時田園雜興六十首」の作者となる范成大的「田園詩人」としての資質を、すでにうかがわせる。

田舎

田舎

呼喚攜鋤至 呼び喚びて 鋤を携えて至り
安排築圃忙 安排し 圃を築くに忙し
兒童眠落葉 兒童 落葉に眠り

鳥雀噪斜陽 鳥雀 斜陽に噪ぐ
煙火村聲遠 煙火 村聲 遠く
林菁野氣香 林菁 野氣 香し
樂哉今歲事 樂しき哉 今歲の事
天末稻雲黃 天末 稻雲 黄なり

○田舎 農家。○安排 役目を割り振る。○圃 稲の脱穀をするための場所。○鳥雀 小鳥たち。○煙火 炊事の時に立ち上る煙。炊煙。○村聲 村里の物音。○林菁 草木の生い茂る場所。○野氣香 野外らしい香気がただよ。○今歲 今年。○天末 空の果て。○稻雲黄 一面の黄色く実った稲を、黄色い雲にたとえる。○『石湖』卷四。五言律詩。韻字は忙、陽、香、黄（下平七陽）。

農家

農家の人々は互いに声をかけ合い、鋤をかついでやって来て、それぞれの役目を割り振り、稲の脱穀場を作る作業に忙しい。子どもたちは落ち葉の上で眠り、小鳥たちは夕陽の中で鳴き騒ぐ。炊事の煙が立ちのぼる村里の物音は、はるか遠くに聞こえ、草木の生い茂る場所には、いかにも野外らしい香気がただよふ。ああ何と楽しいことか、今年の農事は。

空の果てまでも、黄色い雲のような稲がたわわに実っている。

やくわりきめてともどもに
だっこくの ばしょじゅんびする
ことしほうさくうれしいな
そらの はてまで こがねいろ

この詩は、稲の脱穀場を作る作業に没頭する農民たちをうたう。収穫の秋を迎え、農民たちは日の暮れるまで作業に追われている。しかしそんな大人たちの苦勞をよそに、小さな子どもたちは落ち葉の上でぐっすり眠っている。なお「黄雲」の語は多くの場合麦に用いられるが、ここではそれを稲に用いている点に特色がある。

第二章 仕官の道へ 徽州時代 拾遺

《紹興二十四年（一一五四）、范成大は科挙の中央試験に合格し、進士となる。時に二十九歳。紹興二十六年（一一五六）春、范成大は司戸参軍として初任地の徽州（安徽省歙県）に着任。これ以後、紹興三十年まで同地で勤務する。徽州では、三人の上司に相継いで仕える。紹興二十九年（一一五九）九月、范成大の上司となる洪适（前出の洪邁の兄）が徽州に赴任して来る。洪适は范成대를高く評価し、いづれ必ず出世す

るから自愛するようにと諭した。范成大は洪适に五言古詩「古風上知府秘書二首」を贈り、その知遇に感謝している。紹興三十年（一一六〇）十月、范成大は司戸参軍の任期が満了して帰郷する。》

范成大が洪适に贈った次の詩は、拙著では紙幅の都合で割愛した。

古風上知府秘書二首

古風 知府秘書に上の二首（其の一）

神仙絶世立	神仙	世を絶して立ち
功行聞清都	功行	清都に聞こゆ
玉符賜長生	玉符	長生を賜り
籥雲遊紫虚	雲に籥	紫虚に遊ぶ
雞犬爾何知	雞犬	爾を知らん
偶舐藥鼎餘	偶たま	藥鼎の余りを舐む
身輕亦仙去	身	輕く 亦た仙去し
罡風與之俱	罡風	之と俱にす
俯視舊籬落	ふる	籬落を俯視すれば
眇莽如積蘇	眇莽	として積蘇の如し
非無鳳與麟	鳳と麟	と無きに非ざれども
終然侶蟲魚	終然	虫魚を侶とす

微物豈有命

微物びぶつ 豈あに命めい有らんや

政爾謝泥塗

政まさに爾しかく泥塗でいとを謝す

時哉適丁是

時まなる哉かな 適まさに是これに丁あう

邂逅眞良圖

邂逅かいこう 眞まことに良りょう図と

○知府秘書

洪适をさす。「知府」は、州の長官。「秘書」は、

秘書省正字。

洪适の以前の役職名。○神仙 仙人。洪适をたと

える。○絶世立

俗世と隔絶して暮らしている。○功行 功績

と行い。○清都

天帝の住む都。○玉符 玉製のお札。○長生

不老長寿。

○籥雲 雲に乗る。○紫虚 天。○藥鼎 仙薬を調

合する鼎。

○仙去 仙となつて昇天する。○罡風 剛風。空の

高い所に吹いている強い風。

○俯視 見おろす。○旧籬落 昔

住んでいた場所。

○眇莽 はるか遠くに小さく見えるさま。○

積蘇 積み上げた柴草。

みすばらしいもののとえ。○鳳与麟

鳳凰と麒麟。

立派な人物のとえ。○侶 仲間にする。○虫魚

虫と魚。小人物のとえ。

○微物 とるに足りないもの。○命

ここでは、

良き身の定め。幸運。○正爾 まさしくこうして。

○謝泥塗

ぬかるみ道に別れを告げる。しがたない生活から足を

洗う。○邂逅

めぐりあい。○良図 良きはからい。唐・杜甫

の「今夕行」に

「邂逅 豈に即ち良図に非ざらんや」とある。

○『石湖』

卷七。五言古詩。韻字は都（上平七虞）、虚、余

（上平六魚）、俱、蘇

（上平七虞）、魚（上平六魚）、塗、図（上

平七虞）。

古風な詩 徽州の長官で秘書省正字の洪适様にたてまつ
る二首（その一）

立派な仙人は俗世間とはかけ離れた場所で暮らしており、
その功績と行いは天帝の住む都にまで聞こえています。

天帝は仙人に玉のお札を授けて不老長寿の力を賜り、

仙人は雲に乗つて天の世界へと旅立ちました。

ニワトリや犬たちよ、お前たちは何もわかつてはいないのに、

たまたま鼎に残っていた薬の余りをなめたところ、

身体が軽くなつてやはり仙となつて飛び去り、

強い風がそれに伴つたそうですね。

高い空の上から昔住んでいた場所を見おろしてみると、

はるか遠くに小さくなつて、まるで積み上げた柴草のよう。

鳳凰や麒麟がこの世にいないわけではありませんが、

これまでずっと虫や魚を仲間として生きて参りましたが、

微々たる生物には、良き身の定めなどあるはずもないのに、

まさしくこうしてぬかるみ道の道に別れを告げることができま

た。

ああ、やつと時が来たのですね、運よくあなた様にお会いする

ことができました。

あなた様にめぐり会うことができたのは、本当に天の良きはか

らいというものです。

くすりをのんで いぬたちも

てんに のぼれた そうですな
 あなたにあえて わたくしも
 はなのみやこに のぼれそう

この詩は、仙人の世界をうたう「遊仙詩」のスタイルで書かれている。やや長いが、全体は四句ずつ四つの段落に分けて考えることができる。『神仙伝』によれば、漢の淮南王劉安が仙人となつて天に昇つた時、仙菓の余りをなめた犬やニワトリたちもことごとく昇天したという。この詩はこの逸話をふまえて、立派な人物との出会いのおかげで自分も苦境を脱することができたと感じている。范成大にとつて洪适は地方から都への道を開いてくれた大恩人には違いないのであるが、この詩、やや卑屈なように感じられる。

第三章 都での日々 首都勤務時代 拾遺

《紹興三十一年（一一六一）九月、金の海陵王の軍勢が大挙して南侵する。迎え撃つ宋軍は最初劣勢であったが、十一月、虞允文が金軍を采石磯で破ると、勢いに乗じ、各地で敵を撃破する。海陵王は裏切られて暗殺され、金軍は北に撤退する。かわつて世宗が即位するが、なおしばらく緊張状態が続く。紹興三十二年（一一六二）春、范成大は行在所の臨安（浙江省杭州）に赴任する。》

紹興三十二年六月、高宗は前年の戦いをめぐつて主戦派と主和派の意見が対立し収拾のつかなくなつた政局を打開するべく退位し、孝宗（在位一一六二―一一八九）が即位する。孝宗は秦檜を重く用いた先代の高宗とは違い、即位の当初は失地回復に意欲的であつた。

隆興元年（一一六三）五月、將軍張浚による北伐が始まる。宋軍は初めこそ勢いよく進撃するが、宿州（安徽省宿州）で金軍に大敗する。孝宗は知らせを聞くとたちまち動揺し、六月には「己を罪する詔」を発する。結局、戦いはうやむやのうちに終結し、和議の締結へと方針が転換される。

隆興二年（一一六四）冬、宋と金の間に新しく「隆興の和議」が成立する。新しい和議では、紹興十一年（一一四一）に結ばれた「紹興の和議」より若干条件は改善された。ただし国境は「紹興の和議」の取り決め通り淮河のままである。ともあれこの和議により両国間の緊張は緩和され、平和が実現する。

この間、范成大は順調に昇進を重ねていたが、乾道二年（一一六六）三月、昇進が早すぎるとクレームがつき、やむなく官を辞し、祠禄（恩給）を受けて帰郷する。》

次の詩は、范成大が故郷に帰っていた時期の作である。

長沙王墓在闔門外 孫伯符。
 長沙王の墓 闔門の外に在り 孫伯符なり。

英雄轉眼逐東流 英雄 眼を転じて東流を逐う
 百戰工夫土一坏 百戰の工夫 土 一坏
 蕎麥茫茫花似雪 蕎麥 茫茫として 花 雪の似し
 牧童吹笛上高丘 牧童 笛を吹きて 高丘に上る

○長沙王 三国時代の呉の孫策、字は伯符。長沙桓王と諡された。○閬門 蘇州城の西北にある門の名。○転眼 またたく間に。あつという間に。○逐東流 東へ流れる川の水を追いかける。むなしく世を去ることのたとえ。○工夫 物事を成し遂げるのに費やした精力と時間。○土一坏 ひと盛りの土。ここでは墳墓をさす。○花似雪 唐・白居易の七言絶句「村夜」に「月 明らかにして 蕎麥 花 雪の如し」とある。○『石湖』 卷十。七言絶句。韻字は流、坏、丘（下平十一尤）。

長沙王の墓 閬門の外側にある 孫策のことである。

英雄もまたたく間に、東に流れる川の水を追うかのように世を去り、

数々の戦いに精力と時間を費やした結果、残されたのはひと盛りの土まんじゅう。

蕎麥の畑がどこまでも果てしなく広がり、その花はまるで白い雪のよう。

牧童が笛を吹きながら、小高い丘の上に登って行く。

つわものすでによきさつて
 のこされたのははかひとつ
 いちめんしろいそばのはな
 ぼくどうのぼるおかのうえ

孫策は『三国志』にその名の見える人物で、呉の大帝孫権の兄。野戦の英雄で「江東の小霸王」と呼ばれたが、かつて殺した敵の部下に襲われ、二十六歳で非業の死を遂げた（『三国志演義』では于吉のたたりで死んだことになっている）。それにしても、諸葛孔明や周瑜をうたう詩は数多いが、孫策をうたう詩は珍しい。なおこの詩は前野直彬氏の『宋・元・明・清詩集』（平凡社、一九七三年）に収録されている。

次の詩は、于北山氏によれば乾道八年（一一七二）、四十七歳の時の作。もしそうだとすれば使金の後、桂林赴任以前の故郷での作ということになるが、『詩集』の順序に従う。拙著で紹介した「王建に效う」と自ら注する楽府詩四首と同系統の作である。

刈麥行 刈麥行

梅花開時我種麥 梅花 開く時 我 麦を種え
 桃李花飛麥叢碧 桃李 花 飛び 麥叢 碧なり
 多病經旬不出門 多病 旬を経るも門を出でざれば

東陂已作黄雲色 東陂 已すでに黄雲の色と作る
 腰鎌刈熟趁晴歸 腰の鎌かまもて熟を刈り 晴れに趁おそびて歸る
 明朝雨來麥沾泥 明朝みょうちよう 雨 來たらば 麥 泥どろに沾つくわん
 犁田待雨挿晚稻 田でんを犁すき 雨を待ちて晚稻ばんちうを挿さす
 朝出移秧夜食麩 朝あしたは出いでてでて秧なまを移うつし 夜は麩ぶを食たらう

○東陂 東の岡。○熟 みのつた小麦。○趁 機会に乗じる。
 ○移秧 田植え。○麩 むぎこがし。麦を煎り、碾ひいて粉にしたもの。○『詩集』卷十一。七言古詩。韻字は麦、碧（入声十一陌）、色（入声十三職）、帰（上平五微）、泥（上平八齊）、稻（上声十九皓）、麩（上声十七篠）。

麦刈りのうた

梅の花が咲く頃に麦を植え、
 桃やスモモの花が散る頃には、畑の麦は青々と茂っている。
 病気がちのため、十日以上も門から出ずにいたところ、
 その間に、東の岡はすでに黄色い雲のような色になっていた。
 腰につけた鎌で熟した麦を刈り取り、空が晴れているうちに家
 に帰る。
 明日の朝、雨が降れば、麦は泥にまみれてしまふだろう。
 畑を犁で耕し、雨が降るのを待つて晚稲を植える。
 朝には出かけて田植えをし、夜には麦こがしを食べる。

うめのさくころ うえたむぎ
 もものちるころ あおくなり
 とおかもいえを でぬうちに
 ひがしのおかは こがねいろ

麦の收穫が終わったと思ったら、今度は田植え。農家は休む暇もない。

《乾道三年（一一六七）十二月、范成大は処州（浙江省麗水）の知事に任命され、乾道四年（一一六八）八月に着任。乾道五年（一一六九）五月、臨安（杭州）に復歸する。

乾道六年（一一七〇）閏五月、范成大は孝宗の命令により、南宋の臨時の使者として金に赴き、困難な外交交渉にあたることになる。使命は二つあった。一つは「靖康の変」以来金に占領されたままになっている北宋歴代皇帝の陵墓の地の返還を要求すること。もう一つは、宋の皇帝が金の国書を受け取る際の儀礼の改善を要求すること。いずれも大変な難題である。范成大は、決死の覚悟で金の中都（北京）に向かう（『攬轡録』の旅）。時に四十五歳。結局、范成大は二つとも所期の目的を達成できなかったが、金側の高圧的な姿勢にもかかわらず毅然とした態度を堅持し、使命を辱めなかった。》

初稿はこの時の道中で書かれた七言絶句の連作七十二首（い

わゆる「使金絶句」のうち四首を収録していたが、そのうち次の詩を紙幅の都合で割愛した。

宜春苑 在舊宋門外、俗名東御園。
宜春苑 旧の宋門の外に在り、俗に東御園と名づく。

狐塚 獾蹊 滿路 隔
行人 猶作 御園 呼
連昌 尚有 花臨 砌
腸斷 宜春 寸草 無
狐塚 獾蹊 路隅に滿つるも
行人 猶お御園の呼を作す
連昌 尚お花の砌に臨む有り
腸斷す 宜春は寸草すら無し

○宜春苑 北宋時代の離宮の名。汴京の東門の外にある。○旧宋門 汴京の内城の東側にあり、麗景門ともいう。○狐塚 キツネの住む墓。○獾蹊 イノシシの通る小道。○路隅 道ばた。路傍。○行人 旅人。○連昌 唐代の宮殿の名。唐・元稹に七言古詩「連昌宮詞」があり、安祿山の乱後の宮殿の荒廢をうたう。○花臨砌 前出「連昌宮詞」に「上皇 偏に愛す 砌に臨む花、依然として 御榻 階に臨んで斜めなり」とある。○腸斷 断腸に同じ。悲しみのあまりはらわたが断ち切れる。○寸草 短い草。また、ほんのわずかな草。○『石湖』卷十 二。七言絶句。韻字は隅、呼、無（上平七虞）。

宜春苑 かつての宋門の外側にあり、俗に「東御園」と呼ばれている。

キツネの住む墓やイノシシの通る小道が道ばたにたくさんあるのに、
道行く人は、今もなおこの場所を「御園」と呼んでいる。

ああ、唐の連昌宮は安祿山の乱で荒れ果ても石段に臨んで咲く花があつたというのに、
何と悲しいことか、宜春苑にはわずかばかりの草すら生えていないとは。

けもののとおる この ばしよが
いまも ぎよえんと よばれてる
レンシヨウ まだしも はなが ある
あわれ ギンシュン はくさも なし

この詩は連作の第十一首。八月二十日、范成大は北宋の旧都汴京（河南省開封）の近くまで来た所で、この詩を書いていく。ちなみに『攬轡録』には「丁卯、東御園を過ぎる。即ち宜春苑なり。頽垣荒草のみ」と記されている。こちらは「荒草」とあるから、草一本生えていないというのは詩的な誇張であろう。なおこの詩は佐藤保氏の『中国の名詩鑑賞8宋詩附金』（明治書院、一九七八年）に収録されている。

第四章 旅から旅へ 地方長官歴任時代 拾遺

《乾道七年（一一七二）八月、范成大は知静江府广西経略安撫使に任命され、ひとまず故郷に帰る。乾道八年（一一七二）十二月、范成大は平江〔蘇州〕を出発し、静江〔广西壮族自治区桂林〕に向かう（『騷鷺録』の旅）。乾道九年（一一七三）三月、范成大は静江に着任する。

淳熙元年（一一七四）十月、范成大は新たに敷文閣待制、四川制置使兼知成都府に任命され、淳熙二年（一一七五）正月、静江を出発し、成都〔四川省成都〕に向かう。》

次は、成都に向かう旅の途中の作である。

夔州竹枝歌九首 夔州の竹枝の歌 九首（其の三）

新城果園連瀼西 新城の果園 瀼西に連なり
 枇杷壓枝杏子肥 枇杷 枝を押し 杏子 肥えたり
 半青半黃朝出賣 半ば青く半ば黄なるを朝に出でて売り
 日午買鹽沽酒歸 日午 塩を買い 酒を沽いて帰る

○夔州 現在の重慶市奉節。○竹枝 本来は樂府の題名。地方色豊かな民謡風の詩。○新城 新しい町。○果園 果樹園。○瀼西 地名。瀼水の西。○日午 昼。○『石湖』卷十六。七言

絶句。韻字は西（上平八齊）、肥、帰（上平五微）。

夔州の民の歌 九首（その三）

新しい町の果樹園は瀼西まで連なっており、
 ビワは枝もたわわに、アズノの実は丸々としている。
 半ばまだ青く、半ば黄色く熟した実を朝早く売りに出かけ、
 昼頃には塩と酒を買って帰って来る。

くだものばたけどこまでも
 えだもたわわなびわあんず
 とれたてのみをうりにゆき
 かってかえるはしおとさけ

夔州は長江のほとりの町で、かつて唐の杜甫がここに身を寄せた。のみならず、夔州では杜甫は瀼西に住み、果樹園や菜園を営んでもいる。范成大もそのことを念頭に詩を作っているの
 であろう。ちなみに杜甫には七言絶句の連作「夔州歌十絶句」がある。

《淳熙二年六月七日、半年に近い長旅の末、范成大は成都に到着する。着任した范成大は、近くの町にいた陸游を元同僚のよしみで成都に招き、自分の参議官（幕僚）とした。しかし淳熙三年三月、陸游は参議官を辞任し、ほどなく祠禄（恩給）を

受け、范成大の「賓客」となる。范成大は陸游を文学の友人として遇し、仕事の合間に盛んに詩歌の応酬を行っている。

淳熙四年（一一七七）春、范成大は大病をわずらい辞任を願う。五月末、范成大は成都を出発し、帰郷の途につく（『呉船録』の旅）。

六月十四日、范成大は見送りの一行と共に眉州（四川省眉山）の慈姥岩に至る。ここに范成大の船が停泊していた。翌十五日、范成大は見送り客たちと共に岩の下で送別の酒宴を催す。参加者たちは思い思いに詩を作り、別れを惜しんだ。陸游もその中にいる。》

次の詩は、この時の送別の宴席で書かれたものである。

次韻陸務觀慈姥巖酌別二絶
陸務觀の慈姥岩酌別二絶に次韻す（其の一）

送我彌旬未忍回 我を送りて旬に弥るも 未だ回るに忍びず
可憐蕭索把離杯 憐れむべし 蕭索として離杯を把る
不辭更宿中巖下 辭せず 更に中岩の下に宿るを
投老餘年豈再來 投老 余年 豈に再び来たらんや

○次韻 相手の詩と同じ韻字を用いて応酬の詩を作る。○陸務觀 陸游、字は務觀。南宋の代表的な詩人。○弥旬 十日を超

える。○蕭索 しんみりしてさびしい。○離杯 別れのさかずき。○中岩 地名。慈姥岩は中岩にある。○投老 老境に入る。○『石湖』巻十八。七言絶句。韻字は回、杯、来（上平十灰）。

陸務觀の「慈姥岩で酒を酌み交わし別れる絶句二首」に次韻する（その一）

私を見送る道中はまだ十日を超えているのに、いまだに立ち去りかねている。

何とも気の毒なことに、しんみりと別れの杯を手にかけている。

よし、中岩の下でもう一晚、共に過ごそうではないか。

すでに老境に入り、残りの人生、もう二度とここへ来ることもないだろうから。

みおくりのたびはやとおか
わかれのさけをしんみりと
ここですごそうあといちや
またくることもなかるから

《六月十六日、范成大と陸游はついに袂を分かつ。この後、二人は二度と親密な交流の機会を持つことはなかった。陸游と別れた范成大は、峨眉山を遊覧した後、岷江それから長江を下り、一路平江（蘇州）を目指す。十月三日、范成大は平江（蘇

州)の盤門に到着し、『呉船録』の旅は終わりを告げる。

同年十一月、范成大は臨安(杭州)に赴き、権礼部尚書となる。翌淳熙五年(一一七八)四月、范成大は副宰相にあたる参知政事に任命される。しかし弾劾され、わずか二ヶ月で辞任し、祠禄を受けて帰郷する。范成大は、この後しばらく故郷で過ごす。

淳熙七年(一一八〇)二月、范成大は知明州兼沿海制置使に任命され、明州(浙江省寧波)に赴任する。淳熙八年(一一八一)三月、范成大は知建康府兼行宮留守に任命され、四月、建康(江蘇省南京)に着任する。》

第五章 隱棲と療養の日々 晩年 拾遺

《淳熙十年(一一八三)四月、范成大は疲労が蓄積して重病になり、再三辞任を願い出る。八月三十日、范成大は建康(南京)を離任して平江(蘇州)に帰郷。これ以後、世を去るまでの約十年間ほとんど故郷を離れず、療養生活を送りながら晩年を過ごす。》

次の連作は、拙著所収の六言絶句「甲辰の日日 病中にて六言六首を吟じて自ら嘲る」とほぼ同じ頃、すなわち淳熙十一年(一一八四)頃の作と推定される。

曉枕三首

曉枕 三首

煮湯聽成萬籟
添被知是五更
陸續滿城鐘動
須臾後巷雞鳴

湯を煮 聴きて万籟と成し
被を添えて 知る 是れ五更なりと
陸續として 満城 鐘 動き
須臾にして 後巷 鶏 鳴く

臥聞赤脚鼾息
樂哉栩栩遽遽
病夫心口相語
何日佳眠似渠

臥して赤脚の鼾息を聞く
樂しき哉 栩栩たり 遽遽たり
病夫 心口 相い語る
何れの日か 佳眠すること渠の似くならんと

舒慘常隨天氣
關心窗暗窗明
日晏扶頭未起
喚人先問陰晴

舒慘 常に天氣に隨う
心に関す 窓の暗きと窓の明るぎとを
日晏 頭を扶けて未だ起きず
人を喚び 先ず陰晴を問う

○煮湯 葉湯を煮る。○万籟 天地万物の鳴り響く音。○被
かけぶとん。○五更 夜明け。○陸續 連続するさま。○滿城
街中。○須臾 わずかな時間。○後巷 路地裏。○赤脚 召し
使いの女性。○鼾息 いびき。寢息。○栩栩遽遽 『莊子』の
「齊物論」に「昔者 莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶
なり。……俄然として覚むれば、則ち遽遽然として周なり」と

ある。本来「栩栩」は楽しむさま、「遽遽」は形あるさまであるが、ここでは特に意味の区別はなく、四字全体で楽しく夢を見ているさまをいう。○病夫 病気の男。作者自身をさす。○心口相語 心と口が語りあう。自問自答する。○渠 召使いの女性をさす。○舒惨 「舒」は、体の調子が良いこと。「惨」は、悪いこと。○日晏 日が高く昇る。○扶頭 床に臥す。○陰晴 くもりか晴れか。空模様。○『石湖』巻二十三。六言絶句。韻字は其一が更、鳴（下平八庚）、其二が遽、渠（上平六魚）。其三が明、晴（下平八庚）。

明け方 寢床の中で作った詩 三首

葉湯をぐつぐつ煮、その音を聴いて天地万物の鳴り響く音を想像し、

かけぶとんを一枚添えて、時刻がもう夜明けだと気づく。

続けざまに街中の鐘の音が鳴り響き、

それからわずかな時間が経って、路地裏で鶏が鳴く。

横になって召し使いの女のいびきを聞いている。

ああ何とも楽しそうに、ぐうぐう、すやすや。

病気の私は、思わず自問自答する。

いつになったら、彼女のようにぐつすり眠ることができるのだろうか、と。

体調が良いか悪いかは、いつもお天気次第。窓の外が明るい暗いかを、気にかけている。日が高く昇っても、床に臥したまま起きようとなし。人を呼んで、まっ先に空模様をたずねる。

ゆをわかすおと ぐつぐつと
ふとんのなかで よあけしる
まちじゅうのかね なりひびき
ろじからきこえる とりのこえ
めいどのいびききいている
ああたのしそり ぐうぐうぐう
びょうきのわしも 一つのひか
おぬしのようにねてみたい
からだの ちようし おてんきしたい
いつもきになる まどのそと
ひがのぼっても ねたままで
まず そらもよう たしかめる

次の詩は、淳熙十四年（一一八七）頃の作と推定される。

夜雨

夜雨やう

燭花垂穂伴空齋
心事如灰入壯懷
老倦更闌惟熟睡

燭花しよくか 穂ほを垂たれ 空齋くうさいに伴よう
心事しんじ 灰はいの如ごとく 壯懷そうかいに入いる
老倦らうけん 更もう 闌らんにして 惟ただだ熟睡じよくせいせん

任他疎雨滴空階

任まかせん 他かの疎雨そいうの空階くうかいに滴たるに

○燭花垂穂 ロウソクの明かりが光るさま。○空齋 自分以外

には誰もいないがらんとした書齋。○心事 心に思う事。○如

灰 心が燃え尽きて、まるで灰のようである。○壯懷 若く元

気な頃の思い。○老倦 年をとり、何をするのも面倒くさい。

○更闌 真夜中を過ぎ、明け方に近づく。○疎雨滴空階 南朝

梁・何遜の「行くに臨み 故遊と夜に別る」詩に「夜雨 空階

に滴る」とある。「疎雨」は、まばらな雨。「空階」は、人のい

ない階段。○『石湖』巻二十八。七言絶句。韻字は齋、懷、階

(上平九佳)。

夜の雨

ロウソクの明かりが寂しくともり、がらんとした書齋で一人過
ごす私の供をしている。

心に思う事はまるで燃え尽きた灰のよう。それが、若く元気な
頃の思いに入り込んで来る。

年老いて何事も面倒になり、時刻は明け方に近く、ただぐつす
り眠りたいと思うばかり。

あのまばらな雨が、人のいない階段にしたたり落ちるのにまか
せておこう。

ろうそくともる へやのなか
こころは まるで はいのよう
ただぐつすとねむりたい
あまたれのおと ききながら

詩人は、夜遅くまで書齋で書き物でもしていたのであろうか、あるいは物思いにふけっていたのであろうか。深夜を過ぎ、明け方近くなってからようやく睡魔に襲われる。外は、夜通し降り続ける雨の音。病中の作とは限らないが、晩年の范成大の心象風景を伝える作品である。陸游にも夜雨を主題とする七言絶句がたくさんあるので、読み比べてみるのも面白い。

《淳熙十五年(一一八八)十一月、范成大は知福州に任命され、翌淳熙十六年(一一八九)正月、福州(福建省福州)に向かう。しかし途中で病気になる、結局赴任せずに帰郷する。》

次の詩は、閑居生活を送りながらも、まだ完全に枯れ切っていないわが身を自嘲する。

詠懷自嘲

懐いを詠じ自ら嘲る

簷溜春猶凍

簷溜 春に猶お凍り

門扉晚未開

門扉 晩に未だ開かず

退閒驚客至

退閒 客の至るに驚き

衰懶怕書來

衰懶 書の來たるを怕る

日日教澆竹

日日 竹に澆がしめ

朝朝遣探梅

朝朝 梅を探らしむ

園丁應竊笑

園丁 竊に窃かに笑うべし

猶自說心灰

猶自 心は灰なりと説くと

○詠懷 心の中の思いをうたう。○簷溜 軒先の雨だれ。○退

閒 隠退して閑居生活を送る。○衰懶 老いさらばえてものぐ

さ。○怕書來 手紙が来ることを心配する。○教澆竹 竹に水

を注がせる。「教」は、使役。○遣探梅 梅の花の様子（開花

状況）を見に行かせる。「遣」は使役。○園丁 庭師。○窃

こっそり。○猶自 二文字で、なお、の意。○心灰 心が燃え

尽きて灰のようである。○『石湖』巻二十九。五言律詩。韻字

は開、來、梅、灰（上平十灰）。

心の中の思いをうたい、自分をからかう

軒先の雨だれは春でもなお凍りつくように冷たく、
屋敷の門の扉は日暮れになってもまだ開かない。

隠退して閑居生活を送っているの、来客があると聞いては驚き、

老いさらばえてものぐさになり、人から手紙が来ることを心配する。

毎日、竹に水を注がせ、

毎朝、梅の花の様子を見に行かせる。

庭師は、きつとこっそり笑っているに違いない。

「旦那さまときたら、あれでも心が灰のようだとおっしゃるのですからな」と。

まいにち たけに みずを やり
まいあさ らめの ようす みる
にわし こっそり わらって
あれで こころが はいとはね

中国の詩で「詠懷」と言えば、竹林の七賢の代表格である三国魏・阮籍の「詠懷詩」の連作が思い浮かぶ。阮籍の詩は多くが鬱屈した思いをうたうが、この范成大の詩は何ともユーモラスである。拙著所収の七言絶句「枕上にて感有り」同様、この詩も庭師から見た自分がどう見えるかを想像しながらうたっている。こうした客観性を保てることが范成大の長所であり、強みであろう。「怕書來」については、拙著の第五章「旧友からの手紙」の部分参照されたい。

《淳熙十六年二月、孝宗は退位し、光宗（在位一一八九～一九四）が即位する。なおこの年、范成大は朝廷から吳郡開国侯に封じられている。

紹熙三年（一一九二）五月、范成大は太平州〔安徽省当塗〕の知事に任命される。ところが着任してほどなく下の娘が夭折し、辞任して帰郷する。

紹熙四年（一一九三）九月五日、范成大は世を去る。享年六十八。没後、朝廷より銀青光祿大夫を贈られ、吳郡公に追封され、文穆と諡された。

晩年の范成大は療養生活の中で『石湖大全集』を編集し、完成すると、序文の執筆を親友の楊万里に依頼した。『石湖大全集』は今日では失われているが、『石湖居士詩集』その他が現存し、范成大の文学を今日に伝えている。』

おわりに

以上、拙著に収録できなかった范成大の作品十八首を簡単に紹介した。これだけでも「范成大小詩集」といった趣ではあるが、できることなら拙著をあわせてご覧いただきたい。なお、私と范成大の関係は、これで終わるわけではない。周汝昌氏の選集は范成大の詩合計三二六首を収録しており、まだ紹介していない作品はたくさんある。今後の課題とさせていただきます。思えば私と范成大とのかかわりは、最初の論文「成都におけ

る陸游と范成大の交流」（『日本中国学会報』第四十八集、一九九六年）を発表して以来、すでに二十年以上になる。范成大に対する興味関心は、今後時と共により一層深まって行くことであろう。本稿を一つのステップとして、これからも時間の許す限り研究を重ねて行きたい。